

## 黒狐の谷

### 一

ツエジヨン県の県都から六十キロほど北に行くと、小さなラプツェと祈禱旗のはためく峠に至る。峠から見わたすと北側には谷が開けており、そこには様々な草がうっそうと生い茂っている。谷の中ほどにある羊囲いほどの広さの沼沢地では、あちらこちらから水が湧き出ており、それが澄んだ小川となつて谷に流れこんでいる。七、八月になると谷の奥にはシモツケやキンバイ、ムレスズメなどが茂り、色とりどりの花を咲かせ、山の斜面にはエーデルワイスやジンチョウゲが広がり、秋の草原を彩っている。谷の中央を流れる小川の両岸には黄トリカブト、黄シオガマギク、オオバナリンドウなどが咲き、下手の盆地にはメタカラコウ、ムカゴトラノオ、ドクオイチミ、ハイリンドウ、イソギク、タンポポ、白ヨモギ、ツルキンバイなど、植物学者でも判別

に困るほど様々な花が咲き乱れている。数日のうちに色が変わり、新たな香りが広がるたびに、「ケサル王物語」に出てくる「千本蓮の園」とはまさにこのことだと思わざるをえない。牧畜民のテントの周りには、あわせて五、六百頭の馬、ヤク、羊がおり、時に鳴き声をあげながらのんびりと草を食んでいる。その様子を見れば、思わず「美しく豊かなる草原」という言葉が頭に浮かぶ。

この谷は「黒狐ツナクワの谷」という、一風変わった名前と呼ばれている。この名は、谷に生息する狐だけでなく、マーモットまでもがみな黒い体をしていることからつけられたものだ。以前、ツエジョン村の人はみなこの事実を気にもとめていなかったのだが、草地在分割され、この谷が自分たちのものとなってからは、サンジェは口髭を抜きながら、「なんてこった。他の土地では狐はみな赤いっていうのに、この谷だけ黒いのはいったいどうしたことだ」とつぶやきながら考えにふけるようになった。さらには、ツエジョン村の高僧であるアラク・ドンを家に招いた時にも、サンジェはアラク・ドンの前に膝をついて「貫主様、よそでは狐は赤いのに、うちの草地の狐はなぜか真っ黒なんです。それでこの場所は『黒狐の谷』と呼ばれています。このことについてお祓いなどをしていただけませんか？」とたずねた。彼が「うちの草地」と言った理由は、それ以前に県と郷の役人たちが土地を測量して、図面を引いた後で渡された草地使用証なるものの中に、草地の総面積と範囲が明記され、五十年の間はサンジェに帰属する旨がチベット語と漢語両方で書かれていたからだ。

アラク・ドンは草書体で何やら二行したためると、その紙をサンジェに渡した。サンジェはその手紙を手につエジョン僧院に行き、知り合いの坊さんに百元札とともに差し出した。

二

サンジェは今年で五十歳になる痩せ肉で色黒の男だ。顔の下半分には長さの不揃いな髭がまばらに生え散らかっている。何年か前までは、コウモリ印の毛抜きを持っていたので、彼の髭も今みたいにたくさんはなかった。しかしある時、誰かがうっかり毛抜きを踏んづけたか膝をついたかして、毛抜きの口が歪み、髭をつまむのが徐々に難しくなってしまうていた。さらにはテントの引越しをする時にその毛抜きをなくしてしまったので、以来、彼の髭は伸び放題となつていた。しかたなく、彼は暇さえあれば、左手では数珠を爪繰りつつ、右手の親指と人差し指の爪でもって髭を抜くようになった。特に考え事をする時や忙しくなつた時などは目にも止まらぬ早業で髭を引き抜くのだが、残念なことに、毛抜きと比べてみれば爪で抜ける髭などというのはたかがしれたものであつた。

サンジェは普段は物静かで穏やかな性格なのだが、いざとなればかなりの口達者でもあつた。草草が個人単位に分割される前は、集落の若者たちはいつも集まつてはおおげさな口ぶりで暴露

話や馬鹿話をしたりして過ごしていた。ある時、色黒でつぶちよのゴンポ・タシがサンジェに「おい、ガリガリサンジェ、お前は入り婿だから舅のジヤムヤンじいさんに皮なめしの皮みたいにがしがし揉まれてるんだろ。飯も満足に食わせてもらえないで、この長い春をどうやって乗り切るつもりなんだ？」と言ってみなを笑わせたことがあった。

するとサンジェは「おい、つぶちよゴンポ、お前は人の分までがつがつ食って、今じゃすっかりヤクの腹みたいじゃないか。それじゃ立ち上がるのも辛いだろう。でももしお前が本当にヤクだったら最高だよ。ナイフを腹に突き立てて切り裂けば、うまい脂が出てくるんだからなあ。もっともお前の脂なんて臭すぎて人はもちろん犬だって近づけやしないだろうけどな」と言い返し、みなは爆笑した。

ゴンポ・タシは何か言い返そうとしたが、サンジェはその隙を与えずに「おい、つぶちよゴンポ、お前、最近は妹に情歌を歌ってないのか」と言葉を継いだ。みなは先ほどよりもさらに大きな声で笑った。ゴンポ・タシは、今日のところはもう勝ち目はないと悟り、だらしなく笑うと、「わかったわかった、今日は俺の負けだ」と言った。

「妹に情歌を歌って」というのはゴンポ・タシがしでかしたある出来事を指している。彼が結婚してまだ間もないころ、街へと出かけていって帰ってくる時の道中でのことだ。彼は、自分の前を一人の娘がヤクに乗って進んでいることに気づき、自分が独身であること、娘に恋人がいるのかわいなのか、いないなら自分と懇ろになつてほしいことなどを次々と情歌のメロディにのせて歌いつつ

娘を追いかけた。娘はひどく怖がつてしまい、ヤクの脇腹を蹴つて急いで逃げようとしたのだが、馬とヤクでは競争にならない。ゴンポ・タシはすぐに娘に追いついたのだが、よくよく見てみるとそれはよその村に嫁いだ自分の妹であつた。彼は恥ずかしさのあまりどうしていいのかわからなくなつてしまい、そのまま馬首を返し、その場から逃げ出してしまつたという。

サンジェの妻ルドンは、眠る直前まで休むことなく話し続けるおしゃべりであつた。やれ村の支部書記の家の子が出家したとか、村長が小さな自動車を買つたとか、よそ者の何某が羊を五十匹売つて得た代金は贖金だつたとか、今年の冬はお母さんに皮衣を作つてあげなくちゃとか、娘をあの独り者の口唇裂男にやるかどうかさつさと返事をしたほうがいいわよとか、いつ終わるともなく話し続けていたので、サンジェもついに「おい、少し黙つてくれないか。お前の口は痛くならなくても、俺の耳が痛くなつてくるんだ」と言つた。

「あら、口があるんだから話すのはあたしの自由じゃない。あなたの耳が痛いなら聞かなきやいいだけのことだわ」

サンジェは妻と喧嘩したくなかつたので、髭を抜きながら黙つていた。しかしルドンがなおも「草地在分割された時、五十年はこの政策は変わらないつて言つてたじゃない。放牧をやめて草原を守れ、なんていままさら言われたつて。街に引越してコンクリートの家で暮らしたら肉やバターはどうやつて手に入れたらいいのよ。ソナムおじさんの家も街になんか引越さないつて言つてゐるわ……」と愚痴を言つてくるので、さすがのサンジェも切れて、「おいこら、そんなこと

言つてなんの役に立つていうんだ。家畜は全部売り払つてしまつたし、引つ越しの自己資金だつてもう払い込み済みだ。政府が建てた新住居ももう完成している。ほとんどの家は街に引越していった。草地のことだつて、何年か土地を休ませなきゃいけないってだけのことで、土地の権利はこれまで通り俺たちのものはずだ。もし本当に食えなくなつた時にはここに戻つて来ればいいさ。義父さんたちがラサ巡礼から戻つてきたら俺たちも街へと引越すんだ」と言つた。

「何を言っているのよ。ここで年を越してからじゃなかつたの？」

「もうほとんどの家が街に移つてしまつたんだから、ここで正月を過ぎしても誰も会いに来てくれやしないぞ。それに聞いたところじゃ、街の家とやらはそれなりに住み心地がいいんだそうだ。だつたら真新しい家で正月を祝うのも悪くないだろう」

「……」

ルドンの父のジャムヤンは七十二歳で、母のヤンヅムも七十歳になつていた。二人とも働くだけの体力はそこそこ残っていたが、家の実権はすべて婿のサンジェに譲つていたため、集落の人たちもこの一家のことを「ジャムヤン家」とは呼ばずに「サンジェ家」と呼んでいた。サンジェの息子のラゴンキャプはもともと学校に行つていたのだが、小学校を卒業してからラブラン僧院に入り、ゲンドウン・ジャンツォという法名を名乗つていた。彼は数日前から、祖父母と姉のラツォキ、さらにその娘を連れてラサに巡礼に出かけていた。

今サンジエにはするべき仕事は何もなかったけれども、以前にも増してせわしない様子でひっきりなしに髭を抜いていた。

### 三

ひどく寒い朝のこと、サンジエは牧畜民たちが「手扶レシカフ」と呼んでいるハンド・トラクターを二台雇って、一台には燃料用のヤクの糞を詰めた袋をたくさん並べ、その上にさらにヤク肉一頭分と、バター一包みなどの食料品、四角く折り畳んだテント、皮衣、皮の敷物、鍋、茶碗や衣服など家財道具一式を積み上げた。もう一台のトラクターには羊の糞をつめた袋をいくつか積み、その上に仏壇をのせ、さらには家族全員と犬が乗りこんだ。一家は耳を聳する爆音ともくもくたる黒煙をあげながら峠を登っていった。途中、誰もが何度も振り返っては自分たちの小さな土の家と谷全体を見つめていた。峠にたどりつくると、サンジエは懐からさつと一つかみのルンタをとりだして、空に撒き散らし、全身全霊を傾けて「キキ・ソソ・ラギヤロー」と祈りの言葉を叫んだが、折も折トラクターのスロットルは全開だったため、彼の雄叫びもほとんど聞こえぬ有様だった。

一家は午後三時頃によく早く京都に到着した。この地で、一家は、何はさておき脳みそに刻み込みんでおくべき言葉に出くわした。それは「幸福シフフ生態移民村」という単語であった。というの

も、「退牧還草政策」（放牧を停止して、草原の生態環境を回復させようという政策）

のせいで街に住むことになったがどこへ行けばいいんだ」と訊ねる度に、「それじゃあ生態移民村に行くはずだな。だが生態移民村はたくさんある。あんたがたはどこの郷から来たのかね」と訊かれたからだ。

「ツエジョン郷からだ」

「ツエジョン郷、ツエジョン郷ね……。ツエジョン郷の生態移民村のほとんどは街の北側にあるんじゃないかな。いずれにせよ『幸福生態移民村』といって訊いてみればわかるよ」

「なんだって？」 サンジエは休みなく口髭を抜きながら聞き返した。「うまい……？」

「幸福生態移民村だよ」

この時、トラクターの運転手がここで下りるか、それとももっと先まで乗るつもりなら運賃を上積みしてくれと言いだした。

「いくら上積みすればいいんだ」

「トラクター一台につき十元払ってくれ。そうしたら幸福生態移民村まで運んでやるよ」

「じゃ、頼むよ」

トラクターが向きを変えたとたん、交通巡査が手を振ってトラクターに止まれと合図した。運転手二人は顔面蒼白になってブレーキをかけると同時に地面に飛び降りた。だが巡査は運転手たちを気にも留めず、トラクターの上の荷物をしげしげとながめ、「古い品で売れるものはあるかい？ 鍋ややかん、仏像や仏画、古い絨毯や壊れた火おこし道具とか、亡くなった人の茶碗入れ



とか、髪飾りとか、古ければ古いほうがいい」

「馬の鞍……」ルドンが言いかけたところで、サンジェが遮った。「うまい生態……村つていうのはどこにあるんだい？」  
「巡査はサンジェの言葉が理解できず、ルドンのほうに向きなおつて「売り物の鞍があるのかい。飾り鞍かね？ 古いものかい？」

「あれよ」とルドンが一台のトラクターの上にあるサンジェの飾り鞍を指差しながら「もう馬もないのに、鞍だけ残してどうするのよ。買い手がいるなら売ったほうがいいわよ。それが現実的よ」  
「巡査は鞍をつぶさに眺め「五千元払おうじゃないか」と言った。

「鞍は売らないぞ」

巡査は急にサンジェ家の番犬をしげしげと眺めやり「あの犬はいくらなら売るんだ？」と訊いてきた。

「犬は売り物じゃない」一家のほとんど全員が口をそろえて答えた。サンジェは再び「うまい生態……」と言いかけたが、巡査はそれを無視して、またトラクターの運転手のことなど気にもとめず、バイクに乗って去っていった。

三キロほど行ったところで、トラクターが止まり、「ここが幸福生態移民村だ。下りて金を払ってくれ」と運転手が言った。

(続く)

## 訳者解説

ツェラン・トンドゥプ（二九六一）はチベット語現代文学の歴史とともに歩み、作品を発表し続けてきたベテラン作家であり、チベットでも屈指の人気を誇る。ドライで機知に富んだ文体から繰り出されるブラックユーモアに満ちた作品は、人生が悲劇と喜劇の背中合わせであることを思い出させてくれる。闘う作家として知られるツェラン・トンドゥプは、強烈でユニークなキャラクターを切り札に、政治に翻弄されてきた人々の苦しみを真つ向から取り上げ、公務員や宗教者の腐敗にも舌鋒鋭く切り込んでいく。その語り口は痛快、爽快。どの物語もあちこちに毒が仕込まれていて滅法面白い。

以下、作家本人のエッセイや、本人へのインタビュー記録、ツンポ・トンドゥプ氏の研究書『ツェラン・トンドゥプ小説研究』(she ring don grub ky'i sgrung gam la dpyad pa 民族出版社、二〇一四年)などを参照しながら、ツェラン・トンドゥプとその作品について若干の解説を加えたい。

### 一、作家について

チベット語で書くモンゴル人の作家

作家の出身はチベット・アムド地方ソクゾン（中国青海省黄南チベット族自治州河南モンゴル族自治

県である。ソクゾンは青海省の西南部に位置し、黄河上流の肥沃な草原地帯が広がり、牧畜民が多く暮らす地域である。ソクゾンのソクとはチベット語で「モンゴル」を、ゾンは「県」を意味する。この地ではモンゴル人が総人口の九割以上を占めるのだが、実は日常的に用いられる言語はチベット語である。ツェラン・トンドゥプも民族籍はモンゴル人であるが、チベット語を話し、チベット語で書く作家である。

ここで作家の故郷の民族的背景について少し触れておきたい。彼らの祖先は、十七世紀にチベット仏教ゲルク派の軍事的要請を受けてチベットにやってきたモンゴル系牧畜民オイラトの一部族（ホシュート部）である。彼らの長は清朝皇帝から親王の地位を授かり、河南親王と呼ばれた。一七二一年、彼らはゲルク派の大僧院ラブラン寺を建立し、宗教面での権力の安定をはかる。河南親王はラブラン寺における僧院教育はもろろんのこと、一般民衆に対する宗教活動も全てチベット語で行わせるなど、チベット語使用を推進する政策をとったため、この地域の言語的・文化的なチベット化は急速に進んだ。特にソクゾンの中央と北部は親王の統治が直接及んだ地域であり、また周囲をチベット人居住地域に囲まれていたこともあり、ツェラン・トンドゥプの祖父の世代でもすでにモンゴル語は話せなくなっていたという。

一九六一年、ツェラン・トンドゥプはこうした背景を持つ土地のごく普通の牧畜民家庭の六人きょうだいの末っ子として生まれた。父親は親王からの信頼も厚い、腕の良い鍛冶職人として名を馳せた人物だった。父親のまわりにはいつも、銃や剣、鞍、蹄鉄などの修理を依頼する男たち

が集まっていた。男たちは英雄叙事詩『ケサル王物語』から、笑い話、ほら話、冗談に至るまで、ありとあらゆる種類の語りを楽しんでおり、それがツェラン・トンドゥプ少年を魅了したという。チベットでは巧みな語り手であることは立派な男の証とされるが、魅力的な語りのできる男たちに囲まれて育つたことは、作家の文学的素養の形成にとつて、重要な役割を果たしたに違いない。

## 学校教育

頑固な父親が末息子を学校に行かせたがらなかったため、十三歳になるまで父の鍛冶仕事を手伝ったり、家畜を追ったりして過ごした。その後、他の家族の強い勧めで、初めて小学校に入る。当時はまだ文化大革命の最中で、学校教育は決して整ってはいなかったが、兄や姉のもとで読み書きを学んでいた少年は、二年間という短い期間で小学校を卒業し、ちようと文化大革命が終わったその年、ソクゾンの県都の中学校に進学する。ここでみっちりチベット語教育を受けたツェラン・トンドゥプは、その後、州都レプコンにある黄南民族師範学校に進学し、今度は漢語を専門的に学ぶ。一九八〇年代には多くの外国文学が漢語に翻訳されていたので、漢語を通じて西洋の文学や美術にも触れるようになり、西洋への憧れが徐々に高まっていた。また同時にチベット語の伝統文学の作品もどんどん読み進めていった。彼の小説は発想の新しさと端正なチベット語で知られるが、それも師範学校時代の幅広い読書経験が基礎となっていると言えるだろう。

## トンドゥプジャとの出会い

さて、一九八〇年代前半、チベットの文学界に新風を巻き起こしていたのがトンドゥプジャ（二九五三―八五）である。チベット文学に伝統と革新の融合をもたらしたこの作家は、若きツェラン・トンドゥプにも大きな影響を与える。この時代の中高生たちがみなそうだったように、トンドゥプジャの詩や小説を語らしており、それらの作品に触発されて創作活動をはじめた。一九八二年に師範学校を卒業して、チベット語や漢語の教師として働く一方で、小説も書きはじめたツェラン・トンドゥプは、チベット語短編小説「タシの結婚」でデビューを飾る。この作品はラサ（チベットの古都でありチベット自治区の区都）の雑誌『チベット文芸』（一九八三年一号）に掲載され、その後立て続けに作品を発表していく。それらの作品はトンドゥプジャの目に止まったように、一九八四年、西寧で開かれたとある文学賞の授賞式の会場で呼び止められた。その時のことを描いたエッセイ「一九八四」によると、トンドゥプジャは「君がツェラン・トンドゥプか。作品を読んだよ。すごく面白かった。これからも書き続けてほしい」と声をかけてくれたという。それだけに、この翌年の冬、トンドゥプジャの突然の訃報に接した際の衝撃と悲しみは想像するに余りある。

憧れの作家の言葉に励まされ、チベット語現代文学の黎明期から今に至るまで、三十年以上の長きにわたり、小説を書き続けている人、それがツェラン・トンドゥプなのだ。

なお、トンドゥプジャとチベットの現代文学の歴史的背景については『チベット文学の曙』こ

こにも激しく躍動する生きた心臓がある』所収の大川謙作氏による訳者解説に詳しいので、ぜひお読みいただきたい。

### 外国文学へのまなざし

チベット語現代文学の初期から創作活動をしてきたツェラン・トンドゥプのような作家にとつては、手本となるような同時代の文学が極めて少なかった。チベットには古典文学はあつても、それは仏教文学であつて、俗世に生きる庶民の生きざまを描く伝統はなかった。そのためチベット以外の文学から一つひとつ学びとつていく必要があつた。その手本となつたのが外国文学である。

ツェラン・トンドゥプはチベット文学界でも外国文学に最も親しんでいる作家の一人だが、最初のきっかけは学生時代に一九八〇年に刊行された『外国文学作品の鑑賞と分析』という漢語の本を熱中して読んだことだったという。ツンポ・トンドゥプ氏によれば、この本に収録された作品には批判的リアリズムの傾向が強く、この最初の出会いが作家ツェラン・トンドゥプに与えた影響は相当大きいものだといふ。それは彼が批判的リアリズムの代表格であるゴーゴリやチェーホフを好きな作家として挙げていることからわかるし、何より、この作家自身が現実の様々な悪を暴露し、皮肉をこめて批判する作風を貫いていることから明らかである。

この他に好きな作家としてソルジェニーツィンやカフカ、デュラス、ジョイス、オーウェル、ガルシア・マルケス、魯迅、そしてキルギスの作家アイトマトフなどの名を挙げているが、こ

れらはほんの一部にすぎない。特定の作品からの影響を取り沙汰されることもあるが（例えば、本書収録の「ラロ」と魯迅の『阿Q正伝』、そして処女長編『祖先』とガルシアールマルケスの『百年の孤独』）、その幅広い読書傾向ゆえ、特定の作家や特定の作品からの影響を指摘するのは実際のところ困難である。なにしろ常に本を手放さず、ノーベル文学賞受賞作品もいち早く読むほどの読書家なのだ。ちなみに日本の作家で好きなのは芥川龍之介、特に気に入っている作品は「蜘蛛の糸」で、チベット語に翻訳したこともあるという。詳しくは『チベット文学と映画制作の現在 SERN YA』第二号掲載に寄稿された「芥川龍之介とチベット文学」をお読みいただきたい。

外国文学との付き合い方については、インタビューで「外国文学を読むとき主に注目しているのは技法。どんな作品を読むときも、素材ではなく技法を学びとろうとしている。そして自分が創作する場合には素材はローカルなものを使うが、技法はよそのもので構わない」と答えている。外から新しいものを取り入れることに貪欲で、そのことに極めて自覚的な作家だと「言えるだろう」。

兼業作家として

外国文学を好んで読み、自身でも小説を書きながらも、彼はずっと政府の仕事をしていた。師範学校を卒業してから西寧の青海民族学院（現・青海民族大学）、蘭州の西北民族学院（現・西北民族大学）でそれぞれ一、二年ずつ学んだ後、ソクゾンに呼び戻される。最初の職場は司法局法律

顧問処だった。その後、郷政府に勤務した後、県誌編纂所に異動、県誌や年鑑の編纂に長く携わる。司政局や県誌編纂所などの役所で仕事をしていたことは、彼の小説の構想にも少なからず影響を及ぼしている。県誌編纂所所長と檔案局局长を歴任した後、現在は退職して、西寧とソクゾンを行き来しながら創作活動に専念している。

チベットではほとんどの作家が兼業だが、役所に就職した人の多くは才能があっても書くのをやめてしまうという。ツェラン・トンドゥプのように役所で仕事をしながら、作品を発表し続け、作家としてトップランナーの地位を保っている人は希有な存在と言えよう。中でも特筆すべきは、発禁処分となった問題作も含め、四点もの長編小説を発表していることである。三十数年におよぶチベット語現代文学の歴史において長編小説は四十点ほど発表されているが、ほとんどの場合作家一人あたりの作品点数は一点か二点に留まっているのだから、四点という作品数は異例なのである。『祖先』(mes po 香港天馬圖書、二〇〇一年)、『霧』(smug pa 香港天馬圖書、二〇〇二年)を相次いで出版した後、二〇〇二年から二〇〇八年にかけて断続的に『青海チベット語新聞』や『民間文芸』に長編小説の断章を発表していく。その作品『赤い嵐』(ching dhar 'ur 'ur)は、一九五〇年代の中国共産党の「解放」政策に対するチベット人の抵抗とその後の文革期も含めての悲惨な運命を描いた歴史小説である。綿密かつ徹底的な取材と資料の読み込みにもとづいて描き出された狂気の世界は多くのチベット人に衝撃を与えた。政府への強い批判が含まれているとしてどの出版社も引き受けなかったため、二〇〇九年に私家版を出したが、店頭販売は禁止されている



ので著者から直接手に入れるしかない。こうした状況にもかかわらず、『赤い嵐』は極めて多くの人に読まれており、この作品を最も好きな作品として挙げる人は多い。最近刊行された『僕の二人の父さん』(ngsa yi a pha gnis 青海民族出版社、二〇一五年)は出版社の企画した五人の実力作家による書き下ろし長編叢書のうちの一冊である。半世紀の間の教育事情の変化を活写し、人びとの郷愁を誘う秀作として人気を誇り、増刷を重ねている。ツェラン・トンドゥプの長編小説はいずれも徹底した資料の読み込みに基づいているが、県誌編纂所で日頃から歴史資料を扱っていたことが大きく影響していることは作家自身も認めているところである。なお、『祖先』と『霧』は絶版となっていたが、二〇一六年に青海民族出版社から新装版が出版されている。

短編、中編小説を集めた作品集はこれまでに三冊が出版されている。初版の早い順に挙げる。

『ツェラン・トンドゥプ短編小説選』(she ring don grub kyi sgrung thung bdams bsgrigs 青海民族出版社、

一九九六年、新装版、青海民族出版社、二〇二二年)

『ツェラン・トンドゥプ中編小説選』(she ring don grub kyi sgrung 'bring phyogs bsgrigs' 甘肅民族出版社、

一九九七年、新装版、青海民族出版社、二〇一六年)

『ツェラン・トンドゥプ新作短編小説選』(she ring don grub kyi sgrung thung gsar ba bdams sgrig 甘肅民

族出版社、二〇一〇年)

## その人と作風

少年時代はいたずら好きで喧嘩っ早く、他人に欠点があればすぐさま追及するタイプだった。そうだが、学生時代に読書をするようになって、ずいぶん落ち着いたという。しかし持つて生まれた性格は、創作活動をはじめるとペン先からにじみ出てくるようになる。この作家の特徴といえ、誰もが批判精神に富んでいる点を挙げるだろう。

高僧であれ、政府役人であれ、一般の民衆であれ、彼の鋭い批判を免れることはできない。よく取り上げられるテーマの一つに仏教界の腐敗があり、これについて彼はインタビューでこんなふうに答えている。「仏教の思想自体は優れていても、実践する人間が腐っていることはよくある。私はそれを批判しているのであって、私が高僧を批判的に描いたからといって仏教そのものを批判しているわけではない。同様にいくら仏教が素晴らしいからといって盲信するのはおかしい。私が批判しているのはその点であって、仏教思想そのものではない」非常にまっとうな意見だが、こうした発言の背景には、彼の創作意図を曲解し、仏教への冒瀆行為であると批判する者が多いことがうかがわれる。もつとも彼はそうした外野の声には動じずに作品を書き続けているのだが。

ツェラン・トンドゥプの作品は単に他者への痛烈な批判にはとどまらない。批判の矛先が向かった人物として決して特別な人間ではなく、われわれと同じ人間である、そう論じられてしまうのだ。そのことを読者が理解するのは、人間の本質的な弱さや苦悩、そして葛藤をリアルに描いているからこそと言えるだろう。彼は本書収録の中編「黒い疾風」の中でこうも言っている。「こ

の世に欠点が何一つない人間がないのと同様、この世にはよいところが一つもない人間もない。こうした偏りのないもの見方が隅々まで行きわたっているからこそ、彼の物語は読む者の心に突き刺さるのだ。

ツエラン・トンドゥ作品を貫くもう一つの特徴は、毒を含んだ笑いだ。物語には常にブラックユーモアが効かせてあり、悲惨な出来事であればあるほど、まじめな人物であればあるほど、笑いを誘うようなフレーズが仕込まれている。こうした笑いを支えているのは抜群のセンスで配置された諺や比喻などの巧妙なレトリックである。先にチベットでは巧みな語り手であることは立派な男の証とみなされると述べたが、中でも冗談で場を沸かせる能力は極めて高く評価される。こうした社会の中で揉まれたことも多分に影響しているであろう。ともかくあちこちに毒を含んだ笑いが仕掛けられているので、読んでいる方はついつい釣られて笑ってしまうが、その笑いが自分に返ってきてぞっとする。なんだかちよつと怖い笑いである。

さらに忘れてはならないのが、毒を含んだ笑いを誘発するキャラクターの創造である。彼の描く作品の中で最も際立っているキャラクターといえば、多くの作品に登場する高僧のアラク・ドンである。この高僧は地元の人びとに崇め奉られている化身ラマなのだが、一方で小賢しく、ずるい、いざというときには迷わず遁走する、どうしようもない人間としても描かれている。アラク・ドンのダメ指導者ぶりは読者の笑いを誘う一方で、身の回りの誰かにも思えてきてどうにも薄ら寒くなる。ちなみにアラクとは化身ラマをはじめとする高僧に対する尊称で、ドンとは「野

生ヤク」を指す。特定の人物を誹謗中傷しているように受け取られるのを避けて、僧の名前としてはあり得ないこんな名前を付けたのだそうだ。アラク・ドンは(甥のアラク・ヤクも含め)一人の人物として設定されているわけではなく、チベットの化身ラマや転生制度のあり方を凝縮したような存在なのである。

複数の作品に登場するのはアラク・ドンのみだが、他にもキャラクターの際立った登場人物といえは、牧畜民の様々な特徴を一身に背負い込み、数々のドジを踏んで笑わせてくれるラロを忘れてはならない。同名の小説の主人公であるラロは、青つ凍を垂らしてぶらぶら揺らし、時代に取り残されて右往左往する牧畜民の象徴として描かれている。ラロは多くの読者に強い印象を残したようで、ペマ・ツェテンの短編小説で映画にもなった「タルロ」(『チベット文学の現在 ティメー・クンデンを探して』所収)や、ラシャムジャの長編小説『チベット文学の新世代 雪を待つ』、タクブンジャの短編小説「キャプロとその長い髪」(未邦訳)などに、ラロへのオマージュが読み取れる。アラク・ドンにしてもラロにしても、世間から蔑まれるような人物であると同時に愛すべき特性を持ったキャラクターとして描かれており、厳しい現実を描き出すハードボイルドな文章に加えられた絶妙なスパイスとなっている。

### チベット内外での評価

ツェラン・トンドゥプはデビュー時からチベットの文学界で高い評価を受けており、処女作

「タシの結婚」はいくつもの賞を受賞している。またチベット文学界の最高賞の一つ、ダンチャル文学賞を二度受賞しているほか、『ツェラン・トンドウプ新作短編小説選』は青海省の文学賞であるドン文学賞（ドンとは野生ヤク、アラク・ドンのドンである）を受賞している。デビュー当初からラサの『チベット文芸』に掲載され続けていたこともあり、ラサで開催される文学会議に呼ばれることも多く、チベットの東西の作家をつなぐ貴重な役割を担ってきた。さらに漢語でも作品を発表するバイリンガル作家であり、漢語チベット文学の作家たちとの親交も深い。本書の表題作「黒狐の谷」の漢語版は中国全土で発表された作品を対象とする文学賞を受賞している。

また、国際的にも高く評価され、これまでに英語、フランス語、ドイツ語、スウェーデン語、ハンガリー語、ポルトガル語、漢語、モンゴル語、日本語などに翻訳されている。本書収録の「D村騒動記」は本人の知らぬうちにモンゴル語に訳され、モンゴル語ネット文学賞を受賞したという。二〇〇三年にオックスフォードで開催された国際チベット学会にはツェラン・トンドウプ自身も参加して、モンゴル人のチベット語作家たちの活動について報告した経験があり、海外でもその名を広く知られている。ヘザー・ストダールやフランソワーズ・ロバンら、海外の著名なチベット文学研究者とも親しくつきあい、人と人をつなぐ役割を積極的に担っている。われわれのような外国人翻訳者にとってはありがたい作家である。

## 二、収録作品について

本書は、一九八八年から二〇一六年までに発表された選りすぐりの短編十五点、中編二点を収録したオリジナル選集である。以下では本書の収録作品を掲載順にごく簡単に紹介しよう。チベット語原題を転写で示したほか、発表年代と初出誌、担当した訳者名も記した。共訳とある場合は本書の訳者全員による。

「地獄落ち」(Amangs rabu tu dga' ba'i zhos gar 『民間文芸』一九九五年、共訳) 役人の汚職と閻魔の裁定を面白おかしく描く。英雄叙事詩『ケサル王物語』中の「地獄に堕ちた妃アタク・ラモの救出」篇のパロディで、著者が古典をふまえて新境地を開拓した記念碑的な作品である。対話を韻文で歌い上げるスタイルも『ケサル王物語』をなぞっている。原題は「民衆が大いに喜ぶ劇」で、劇中劇(いわゆる劇オチ)の形式をとった作品である。閻魔大王の前で暴かれる役人の悪事の数々には二十世紀のチベット激動の歴史が織り込まれているが、その筆致は見事なまでに小気味よく軽やかである。『民間文芸』二十周年記念文学賞受賞。

「ツエチュ河は密かに微笑む」(rise chus khrel dgod byed bzhih 『青海民間文芸』一九八八年、三浦順子訳) アラク・ドンの不義密通とその後始末のつけ方を皮肉たつぷりに描く。

【黒い疾風】(Yung nag Ishub ma 『チベット文芸』一九九七年、星泉訳) 千戸長に恋人を奪われた青年の復讐劇であり、熱血漢だが身の回りのことしか知らなかった家畜追いが、千戸長やアラク・ドンの悪行や不誠実に接し、むこうみずに闘ううちに世の中を理解していく冒険活劇でもある。孤独なガンマンとなった主人公が黒づくめの出で立ちで荒野を馬で駆け回り、次々と敵をなぎ倒していく様は、さながら西部劇のよう。しかし登場人物はそれぞれに複雑な性格を持つ人物として描かれており、読み応えがある。二十世紀前半のアムド地方の歴史を踏まえており、またラブランの僧兵の実態など、当時の世相をよく映し出した中編小説である。

【月の話】(Zla ba'i gnam gyud 『青海チベット語新聞』一九九六年、海老原志穂訳) 人間の奢りによる環境破壊をテーマとしたSF的な小品。

【世の習い】(spyi'gyos shig 『ダンチャル』二〇〇〇年、大川謙作訳) 牧畜民の淡々と繰り返される日常を一生になぞらえて描く。原題は「公式」。タクブンジャの「一日のまぼろし」(『ハバ犬を育てる話』所収)と同じアイディアの作品で、比べて読むと興味深い。

【ラロ】(ra lo 『ダンチャル』一九九一年、十一章まで共訳、十二章以降三浦順子訳) 社会の急激な変化に

ついでいけない牧畜民の滑稽で悲哀に満ちた姿を愛すべきダメ男、ラロに託してリアルに描き出す。当初十一章で完結した作品として雑誌に発表されたが、十二章の冒頭にあるように、『ダンチャル』編集部からのたつての要望で続きを書いたといういわくつきの中編小説。本文に触れられている通り、実は前編が雑誌に掲載された翌年に、著者は濡れ衣を着せられて塀の中でしばらく過ごした経験があり、獄中の様子はその時の参与観察にもとづくものである。とりわけ獄中で虱と格闘する描写にはカフカの「変身」にも似た鬼気迫るものがある。三浦順子氏による「虱から見たチベット現代文学」(「チベット文学と映画制作の現在」SERNYA』第四号所収)を併せてお読みいただきたい。本作品以降、歴史を作品の中に取り入れる傾向のほか、時間軸を交錯させて現実と妄想をないまぜにして物語を展開させる傾向が強まっていく(それは後の長編小説において見事に結実している)。第三回ダンチャル文学賞受賞。

〔復讐〕 (*agru sha len pa* 『民間文芸』二〇〇五年、星泉訳) 父親を殺した相手に復讐するためについに立ち上がった若者の一日から、復讐が連鎖していくさまを浮かび上がらせていく。短いながらも迫力のある作品。

〔兄弟〕 (*geen scung* 『青海チベット語新聞』二〇〇八年、星泉訳) 結婚を機に兄弟関係が壊れていく悲劇を描く。次の「美僧」とともに草地争いの実態が描きこまれている。



【美僧】(bssun yag 『ダンチャル』二〇〇三年、海老原志穂訳) 心中の葛藤に対処しきれず、酒と女に溺れて破滅寸前となった美貌の僧の妄想と現実、そして驚くべき顛末を描く。著者が人間の複雑で分裂気味の心理を描く転機となった作品。第五回ダンチャル文学賞受賞。

【一回の真言】(ma ni geig 『青海チベット語新聞』一九九六年、共訳) 義兄弟の契りを結んだ男同士の冥土での再会の様子と閻魔大王の裁定の妙をユーモアたっぷりに描く。

【D村騒動記】(D sde ba i klu ka 『ダンチャル』一九八八年、共訳) 文化大革命で徹底的に破壊された僧院が、一九七九年の改革開放以後、再建される。その宗教復興、僧院再建の時代に陰で搾取されて苦しんだ一般民衆の姿を描く。一九九〇年には自身の翻訳による漢語版が雑誌『青海湖』に発表された。

【河曲馬】(ma kluq sov ling 『西藏文学』二〇一三年、星泉訳) 競馬を題材に、牧畜民らしく生きるとはどのようなことかを追究した作品。世代による考え方の違いを浮き彫りにしているのも特徴。キャリアアウーマンが活躍する数少ない小説の一つであり、そこには都会で高等教育を受けた若者の悲哀も織り込まれている。本作品は同名のテレビ映画のために書き下ろした脚本を自身で小説化した

もので、漢語版がラサの老舗漢語文芸誌『西藏文学』に掲載された後、二〇一四年に著者自身の翻訳によるチベット語版が『チベット文芸』に掲載された。邦訳には両方の版を参照した。

【鼻輪】(sna gcu) 『ダンチャル』二〇〇八年、星泉訳) ギャンブル依存症に陥った青年が更生するきつかけとなった出来事を描く。いざという時には必ず助け合うチベットの人びとの姿も印象深い。

【親の介護をした最後の人】(ches mjing mha i pha ma snyor skyong byed mkhan) 『青海チベット語新聞』二〇〇九年、海老原志穂訳) グローバル化の進んだ社会の現実と、仏教にもとづくチベット式の考え方の齟齬を皮肉たつぷりに描く。

【あるエイズ・ボランティアの手記】(e' gog rang 'dun pa zhe g'u zin thun) 『ダンチャル』二〇一六年、大川謙作訳) エイズがひろまりつつあるチベット社会に警鐘を鳴らすため、病院関係者に綿密な取材をして書き上げた作品。朗読版がインターネット上で公開されている。

【ブムキャブ】(bum skyabs) 『ダンチャル』二〇〇九年、三浦順子訳) 政治腐敗をコミカルに描いた作品。チベット語と漢語を混ぜた役人たちの会話が極めてリアルである。冒頭に、著者の敬愛する作家ゴーゴリによる戯曲「検察官」のエピグラフと同じことわざを引用してオマージュを捧

げている。

「黒狐の谷」(su nag lung ba 『ダンチャル』二〇一二年、共訳) 生態移民政策により移民村に移住した人びとの厳しい現実と彼らを襲った悲劇をつぶさに描いた衝撃の記録文学的作品。二〇一四年には北京の文芸誌『民族文学』(チベット語版)にも掲載された。刊行されてすぐに話題になり、英語、フランス語、ドイツ語、漢語、モンゴル語などにも翻訳されている。第二十三回東麗杯全国梁斌小説賞において短編小説部門最優秀賞。

以上、収録作品を紹介した。初期の作品では牧畜の村落社会での暮らしが中心に描かれているが、徐々に舞台を都市部に移し、故郷は帰れない場所として描かれるようになる。扱う題材も時代が新しくなるにつれ、生態移民政策やエイズ、介護、政界の汚職といった今まさに起きている最先端の問題を積極的に取り上げるようになる。それらを真に迫る物語に仕立て上げていくのがこの作家の真骨頂である。文芸誌のみならず新聞掲載の小説が目立つことにも注目していただきたい。

### 三、現代という荒野で

様々な表現技法や題材に次々とチャレンジして人びとの話題をさらうツェラン・トンドゥプ

は、チベット文学に常に新風を吹き込んでゐる。今やチベット文学界の重鎮となつたツェラン・トンドゥプだが、民族籍がモンゴル人であることについては、まだ不思議に思う読者がいるかも知れない。歴史的な経緯は先に述べた通りであるが、故郷のソクゾンに古くからチベット仏教への信仰の篤さも相俟つて、チベット語教育が極めて盛んな地域であつた。モンゴル人の学生が九割以上を占めるソクゾンの中学はチベット語教育のレベルが高いことで知られ、著名な作家や詩人、学者を何人も輩出している。例えば現在フランス在住で詩人、小説家、映像作家として八面六腑の活躍をしているジャンプはツェラン・トンドゥプの中学の同級生であり、また有名な女性作家デキ・ドルマも同じ中学の出身である(ツェラン・トンドゥプの教え子でもある)。自ら「私の骨はモンゴル人。しかし、この人生で私が話してきたのはチベット語であり、得てきた知識もチベット文化のものである」と語つてゐることからもわかるように、ツェラン・トンドゥプはモンゴルとチベットという二つの出自を持った作家なのである。

「チベット人でない」という出自のせいか、彼の作品からは、特定の民族に縛られない視野の広さが顕著に感じられる。例えば、チベット人の作家はチベットの伝統的な暮らしを描くことになつたり、登場人物をチベット人のみにしたり、登場人物にチベット語しか話させない(あるいはチベット語のみを話すことをよしとする)など、チベットらしさを強調する傾向がある。彼はそうした傾向を「もう存在しないユートピアを描く理想主義」と批判し、自身はリアリズムを貫く。実際、彼の作品にはチベット社会の変わりゆく様がありありと捉えられているし、漢語・チベッ

ト語混じりで話すチベット人の役人や学生、そして漢人や回人も頻繁に登場する。本書に収録した「ブムキャプ」や「河曲馬」、「黒狐の谷」などの作品を読めば、漢語の支配が進行しているチベットの現実が如実に見てとれるだろう。宗教者への批判を辞さない態度も、こうした出自と無関係ではないだろう。

チベットの現代文学にはその時代の世相が映し出されているが、徹底したリアリズムに貫かれたツェラン・トンドゥプの作品を読むことで一層はつきりと理解できることがある。その象徴的なものが「父の不在」である。今回の作品集でも、「ツェチュ河は密かに微笑む」「ラロ」「黒い疾風」「美僧」「復讐」「兄弟」の六作品は母子家庭か孤児の話である。作家によれば、牧畜民の間では昔から私生児が多いという現実の現れであると同時に、一九五八年、人民解放軍による「解放」に抵抗した多数の男たちが命を落としたという歴史の悲劇も反映している。しかしそれだけではない。「父の不在」は男らしさ、家父長らしさの失墜を象徴するものであり（実際、社会の急激な変化と生活の現代化にもなつて牧畜の仕事が縮小し、牧畜民の男の仕事の多くは失われてしまった）、それはまたアラク・ドンの無力さに象徴される宗教的権威の失墜、汚職と虚偽にまみれた役人に象徴される政治不信とも重なり合つて、従来の価値観が崩壊した不安定な時代を模索しながら生きていくという現実を、読者にまざまざと見せつける。

頼れるものもなく荒野に放り出されたわれわれはいかに生きるべきか。ツェラン・トンドゥプはいたずらっぽい笑みを浮かべながら、そんな同時代の問題をわれわれに投げかけてくる作家なのだ。

さて、本作品集の翻訳にあたっては、著者をはじめたくさんの方にお世話になった。

ツェラン・トンドゥプ氏本人には掲載作品の選定の段階から大変お世話になった。翻訳の過程で分からないことがあればいつも気軽に相談に乗ってくれ（時には絵を描いたり写真を調達したりして、熱心に教えてくれた）、チベット文学研究会のメンバーが西寧を訪れた際にはいつも、洒落たインテリアの自宅で温かくもてなしてくれた。容赦のないハードボイルドな文章からは想像できないほど声が小さいのだが、いったん話しはじめると、作品同様、独特の切り口のユーモアでわれわれを笑わせてくれる。作家たちとの交友関係も広く、これまでも何人もの作家をわれわれに紹介してくれ、チベット文学の多様性と未来を感じさせてくれた。そうしたこれまでのあらゆることに感謝を捧げつつ、本書の出版をともに喜びたい。

ツェラン・トンドゥプ研究の第一人者である中央民族大学のツンポ・トンドゥプ氏は、研究書を通じて作家の様々な顔を教えてくれた。チベット文学研究会の編集している雑誌『チベット文学と映画制作の現在』SERENYA』第四号には「ツェラン・トンドゥプとその短編小説がもたらす影響」というエッセイを寄稿してくれたので、ぜひ本書とあわせてお読みいただきたい。

装丁画として迫力ある雌雄のドン（しつこいようだがアラク・ドンのドンだ）の油絵を提供してくれたツェラン・トンドゥプ氏（たまたま作家と同名である）は映画監督のソントアルジャ氏のもとで美術を担当している新進気鋭のアーティストだ。デザイナーの萩原睦氏は装丁画を活かして本作品

のイメージを伝える素敵な装丁をほどこしてくださった。

本書は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で実施されている大型プロジェクト「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」の成果の一部であり、出版のためにプロジェクトから財政的な支援を受けた。

勉誠出版には、二〇一二年のトンドゥプジャ作品集、二〇一三年のペマ・ツェテン作品集、二〇一五年のラシャムジャ長編小説に続いて、ありがたくも四作目となるチベット文学作品の出版を快諾していただいた。特に編集部の堀郁夫さんと森貝聡恵さんには大変お世話になった。

一人ずつお名前を記すことはできないが、応援してくださった全ての方々に感謝したい。

そして最後に、この本を手にとってくださった読者のみなさんに、心からの感謝を捧げたい。

二〇一七年三月三日

訳者を代表して 星 泉